

『大阿弥陀經』における阿羅漢の般涅槃と菩薩の往生

佐々木 大悟

【はじめに】

『大阿弥陀經』^①は、菩薩と同時に、阿羅漢（声聞）^②に対しても否定的な意味を込めずに記述している希有な大乘經典である。その両者の記述の割合は五分五分といつてさしつかえない。今回はその『大阿弥陀經』の阿逸菩薩（弥勒）を対告者とする部分をテーマに扱う。

『大阿弥陀經』の中でのその阿逸部は順に

阿弥陀仏国の阿羅漢の般涅槃

↓菩薩阿羅漢の住まい

↓阿弥陀仏の般涅槃

↓阿弥陀仏の光明壽命無量

↓（阿難の質問） 二下卷二

↓往生段（菩薩の往生と二種の往生）

↓菩薩・阿羅漢の徳

↓以下、三毒五惡段へ

という構成になっている。

その『大阿弥陀經』の阿逸部のうち私は、阿羅漢の般涅槃の記述と菩薩の往生の記述に注目した。

【阿羅漢の般涅槃】（本文和訳）

阿逸菩薩は、立ち上がり進んで、膝まづいて合掌して、仏に問うて申し上げた。「阿弥陀仏国の中の阿羅漢たちで般涅槃して去っていくものがありますでしょうか。お聞きかせ下さい。」……（中略）……：仏はおっしゃった。「阿弥陀仏国の阿羅漢たちで般涅槃して去っていくものは無数であり、そしてそこにあつて新たに道を得るものもまた無数であり、増減がない。」^③

ここでは、阿弥陀仏国で般涅槃する阿羅漢が無数であることを述べている。

【菩薩の往生】（本文和訳）

仏は阿逸菩薩に告げた。「世間の人々の中、善男子・善女人で阿

弥陀仏国に往生したいと願うものに三種類ある。徳を積むことに差があつて、互いに隔たり合つてゐる。」

仏はおつしやつた。「なにが三種かと言へば、（以下のとおりである。）

最上の第一輩の者は、家を去り、妻子を捨て、愛欲を断ち、沙門となり、無為の道をすすみなさい。菩薩道を行い、六波羅蜜の教えを行じなさい。（そのような者は）沙門となり、教えを破ることがなく、慈悲心を持ち、精進し、怒らず、女性と交わらず、齋戒し、清浄になり、貪りの心をもたず、まことの心で阿弥陀仏国に往生したいと願ひなさい。⁽⁴⁾」

以上の書き出しではじまる三輩と、さらにそれ以外の二種類の往生者によつて往生段全体は構成されている。その合計五種類の往生者は、私見では、

- ・出家の菩薩
 - ・熱心な在家（いづれ阿惟越致の菩薩になる）
 - ・熱心ではない在家（いづれ阿惟越致の菩薩になる）
 - ・十善を行い、往生を目指すもの
 - ・俗事に忙しく十分に齋戒できないが、往生を目指すもの
- という分類になっていると読み取れる。

【問題意識】

『大阿弥陀經』全体の構成と、この部分との関係を考える

上で次の疑問が浮かんできた。

①往生段では、出家であり、かつ菩薩道を目指すにないものについて言及されていないがそれはなぜか。

②菩薩と阿羅漢は、『大阿弥陀經』ではしばしば対概念として描かれるが、阿逸部のこの部分はどのような構成になつていないように見える。

③菩薩について述べた往生段の直後に「菩薩の徳」ではなく、「菩薩・阿羅漢の徳」⁽⁶⁾が描かれるのはいささか唐突な印象を与えるが、それはなぜか。

これらの問題意識を持ちつつテキスト及び先行研究に目を通した。

斎藤舜健氏は『大阿弥陀經』のこの阿逸菩薩を対告衆とする部分の内容を「阿弥陀仏国への往生に関する記述」とまとめたが、その「この箇所はずつと往生に関することを述べている」という見解に筆者は触発され、本論文の視点が生まれた。

この両者（阿羅漢の般涅槃と菩薩の往生）は、間に阿難の質問などをはさんでいることと、經典の体裁として上巻から下巻に移ることによつて、一見大きく区切られており、別々のことを述べているように見えるが、いずれも阿逸菩薩を対告者にしており、テーマに連関性があると私は考える。その連関の共通項は、「阿羅漢・菩薩のそれぞれの阿弥陀仏国との

関わり」と言うことができる。

阿羅漢は、複数の仏国土を前提とする「往生」という概念と一緒に語られない。阿羅漢は阿弥陀仏国という一仏国土内だけで語られ、そしてその目的である「般涅槃」を果たすことが述べられる。

一方、菩薩は仏国土間を行き来する存在であり、「般涅槃」と一緒に語られない。阿弥陀仏国へ往生して（環境を利用して）、仏になるという目的を最短で果たすことを目指す存在である。

言い換えるならば、阿羅漢は往生には関わらないし、菩薩は般涅槃には関与しない。この両者はそもそも別の仏道体系であり、『大阿弥陀経』の他の箇所でも、必ず住み分けて記述されている。

そのため、両記述は一見まるで別のことを描いているように見える。しかし、対概念を意識すると「阿弥陀仏国との関わりで阿羅漢も菩薩もそれぞれにメリットを獲得できる」という連続した意識をもって制作者は描いていたと読みとることがができる。

【新しく見えてくること】

●問題意識①について

このように考えると、「なぜ、往生段で出家菩薩・在家で『大阿弥陀経』における阿羅漢の般涅槃と菩薩の往生（佐々木

菩薩を目指すもの、そしてただの在家者が描かれるのに、ただの出家者（即ち阿羅漢を目指すもの）が描かれぬのか」という疑問が解決する。

菩薩を指さない側の出家（阿羅漢）は先（上巻）にすでに言及していたと考えて、阿羅漢の存在をここに加えれば往生段は、出家菩薩・在家で菩薩を目指すもの・菩薩を指さない出家＝阿羅漢を目指すもの・菩薩を指さない在家となり、考えうるすべての修行者を一通り述べたことになる。

●問題意識②について

阿羅漢と菩薩の対概念的記述の傾向として最も不明瞭だった阿逸部の今回の箇所に対して、この見方をするこゝとよって、「ここでも、阿羅漢と菩薩が対概念で語られている」と考えることができるようになる。また、それによって、「常に対概念で描こうとしている」という筆者の想定をより強めるものとなった。

●問題意識③について

往生段の次に「菩薩・阿羅漢の徳」の章段がある理由は、今回の視点を取り入れるならば、以前の文脈から意識がつかっていた話であったからであったと理解できる。離れていなければならない、前の「阿羅漢の般涅槃部」の文脈を引きずっており、そのためここでもそれをふまえて主語が「菩薩・阿羅漢」となったと考えられる。すなわち、阿羅漢の般涅槃では

じまる一連の文章が、この「菩薩・阿羅漢の徳」の部分でもって一つの段落の終わりを見せているのだろう。

【まとめ】

本論文は、視点を提示するものであった。阿羅漢の般涅槃部と菩薩の往生部を巨視的に見て対応しているという仮説を示したものである。

今回の結果は不明瞭なある一部分の対応を検討したものであったが、対概念で語る傾向は明白なものを含めてむしろ『大阿弥陀經』全体を貫くものと言える。私は『大阿弥陀經』を「菩薩・阿羅漢の交錯した文章の連なり」として見ることを考えている。『阿闍佉國經』が「弟子学成品」と「諸菩薩学成品」と章を区切ってそれぞれをまとめて記述しているのに対して、『大阿弥陀經』はトピックごとに一々、阿羅漢側と菩薩側について記述するという表現上の特徴を持っている。そのため文章は阿羅漢の記述と菩薩の記述を交互にくり返し、非常に込み入っているように見える。

この阿羅漢と菩薩を等価値として描いていく『大阿弥陀經』の特徴は、「菩薩阿羅漢」という主語が繰り返し（八十四回）登場することからも裏付けることができる。この段階の形跡が残っていることは浄土經典としてだけでなく、初期大乘經典としても貴重なことだろう。

1 『仏説阿弥陀三耶三仏薩樓仏檀過度人道經』（『大正蔵』十二、三〇〇—三二七頁）

2 『大阿弥陀經』で「阿羅漢」とある場合、阿羅漢果を指すもの全体（声聞道）を指す場合が多い。

3 阿逸菩薩即起前長跪叉手、問佛言、阿弥陀佛國中諸阿羅漢、寧頗有般泥洹去者无、願欲聞之。……（中略）……佛言、阿弥陀佛國諸阿羅漢般泥洹去者无央數、其在新得道者亦无央數、都不爲増減也。（『大正蔵』一二、三〇七—三〇八頁。句読点は筆者による。以下も同じ。）なお、訳に際して辛嶋静志「大阿弥陀經訳注一六」（『仏教大学総合研究所紀要』七一—一二号、一九九一—二〇〇五）を参照した。

4 佛告阿逸菩薩、其世間人民若善男子善女人願欲往生阿彌陀佛國者有三輩。作徳有大小轉不相及。佛言、「何等爲三輩。最上一輩者、當去家捨妻子斷愛欲、行作沙門、就無爲之道、當作菩薩道、奉行六波羅蜜經者。作沙門、不虧經戒、慈心精進、不當瞋怒、不當與女人交通、齋戒清淨、心無所貪慕、至誠願欲往生阿彌陀佛國。……」（『大正蔵』一二、三〇九—三一）。

5 この論は、「三輩は菩薩道を目指すものに対して説いている」ということを前提にして展開している。この点についてはさらに十分に検討する必要がある。ちなみに、後期無量寿經では、三輩段の主語は「衆生」である。

6 具体的には「佛言、阿彌陀佛國諸菩薩阿羅漢衆等大聚會自然都集、拘心制意、端身正行、遊戲洞達。俱相隨飛行、飄飄出入。供養無極。歡心喜樂、共觀經行道、和好久習、才猛智慧。志若虚空、精進求願、心終不復中徊、意終不復轉、終無有懈極時。……」（『大正蔵』一二、三二一頁）ではじまる文章である。

7 齊藤舜健「無量寿經の対告者」（『仏教学浄土学研究』永田文

昌堂、二〇〇一年三月。

8 『無量寿經』でも同じ箇所を下巻に移る。ただし『平等覺經』はそうはなっていない。

9 未得須陀洹道者、即得須陀洹道。未得斯陀含道者、即得斯陀含道。未得阿那含道者、即得阿那含道。未得阿羅漢道者、即得阿羅漢道。未得阿惟越致菩薩者、即得阿惟越致。〔大正藏〕一二、三〇五頁〕など。

10 間に「阿弥陀仏の般涅槃」などの項目が入っている理由は、私の予想では、阿羅漢の般涅槃の記述に触発されたことが考えられる。

*付記 小論は平成十六年度山内慶華財団の援助による研究成果の一部である。執筆にあたり、この場をかりて関係者に甚深の謝意を表したい。

〈キーワード〉『大阿弥陀經』、阿羅漢、般涅槃、菩薩、往生

（龍谷大学研究生）

『大阿弥陀經』における阿羅漢の般涅槃と菩薩の往生（佐々木）

search, it is clear that the *Mahāyānasamgraha* was composed later than the *Mahāyānasūtrālamkāra-bhāṣya*.

103. The Parinirvāṇa of the Arhat and the Rebirth of the Bodhisattva in the Pure Land in the *Da Amituo jing*

Daigo SASAKI

In the *Da Amituo jing*, there are two types of practitioners. One follows the path of the arhat (śrāvaka), and the other is the path of the bodhisattva. These two are written about at several parts of this sūtra, and the arhat is not described as an inferior being. This is unusual among Mahāyāna sūtras.

The parinirvāṇa of the arhat (T. 12, pp. 307-308) and the rebirth of the bodhisattva in the Pure Land (T. 12, pp. 309-311) are explained separately at different places in the sūtra. There seems to be no relation between these two parts. However, both parts are presented in response to Ajita's question. And, taking into consideration the unique stance of the *Da Amituo jing* in which the arhat and bodhisattva are often spoken of as a pair, I think these two parts are closely related.

104. Jingyingsi Huiyuan's Theory about the Essence of the Buddha's Teaching

Ippei OKAMOTO

The main aim of this report is to elucidate Jingyingsi Huiyuan's (淨影寺慧遠) theory about the essence of the Buddha's teaching, with a focus on the *Dacheng yizhang* (大乘義章), "San Zang Yi (三藏義)" chapter.

Huiyuan considered the essence of the Buddha's teaching to be śabda-āyatana and rūpa-dharma, not nāma-pada-vyañjana-kāya. Therefore, Huiyuan never recognized *viprayuktasamkāra* as *dravya*.

In the history of Buddhist philosophy in China, Huiyuan's theory is interesting. His theory approaches the Sarvāstivādin's doctrine which most Chinese Buddhists considered elementary and superceded by Mahāyāna ideas.